



# ピッポ新聞

2007

11

No.225

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

## ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL &amp; FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

### 絵本『わたし』 を思い出したわけ

それはそれはショックなできごとだった。

飯田橋から新宿へむかっている総武線の中のことだ。電車は混雑していなかったが、席に座ることができない状態で、ぼくはつり革につかまって立っていた。

すると目の前の男子高校生が立ち上がって「どうぞ」という。一瞬、その行為がぼくにむけられたものであることが理解できず、おもわずまわりを見回した。しかし、その対象がぼくであることは間違いないようである。

一度は遠慮したのだが、かさねて高校生が「いいですから」という。自分の経験からも、譲った相手に固辞されると思いのほかきまりが悪いものだ。そこで、ぼくは好意を受けたのである。一見すると、なんの変哲もないことではある。



いやむしろ、こんな世相である現在は、もし、ぼくも傍観者の一人として、この場面をながめていたのであれば、好ましく思ったこと

だろう。だが、譲られた本人であってみれば話は全然別である。

これまで、席は譲るものという認識(この考えは当分かえるつもりはない)しかもちあわせていなかったのである。それが生まれて初めて席を譲られたのだ。世の中には予期せぬことと遭遇することは間々あることだが……。こんな時は、ちかごろ不都合が生じた場合にもちいられる「想定外のできごと」とでもいえばよいのだろうか。

ともかく、生まれて初めて席をゆずられたことは、ぼくには相当ショックなことであった。

そこで、つい考えてしまったのは、「ぼくはこの高校生に、どんな風につながっていたのだろうか?」ということである。

普段は他人さまの目など気にもならないが、このときはばかりはそれを思わないわけにはいかなかった。

件の高校生は、ぼくを「老人」として見たのだろうか、はたまた、「しょぼくれた田舎のオヤジ」に映ったのだろうか?

ここで浮かんできたのが、谷川俊太郎と長新太の絵本『わたし』(かがくのとも傑作集 880円 福音館書店)だ!

ぼくのお気に入りであるこの絵本、「わたし」のことをまわりの人たちがどのように見ているかをわかりやすく、ユーモラスにえがいているのである。

「わたし」はおとこのこからみると女の子。あかちゃんから見るとおねいちゃん。おにいちゃんから見るといもうと。おかあさんから見ると

むすめのみちこ。おとうさんからみてもむすめのみちこ……。という具合に、相手の立場によって、「わたし」との関係がちがってくることをわかりやすく説明している。

小さな子どもにも、「わたし」との関わりをしめすことで、いわば、主人公の取り巻く社会(世界)がわかりやすいのである。

わたし 高校生から見ると「おじいさん」？

あーあー、やだやだ！

ぼくは孫にだって「おじいちゃん」ではなく「さん」としか呼ばせていないんだ！

それにだよ、11月11日の日曜日にはピッポ山岳会と名乗って、井川もみじマラソン走ります。(これ強がり?)

みなさん、

たまにはさ、世間さまに自分がどのように映っているのかを考えるため、この絵本『わたし』を思いだしましょう！

## なー、この本読んだ?

『もうわらった』(やすおかかよこ・うしろよしあき・文 かしまり10絵 893円 教育画劇)

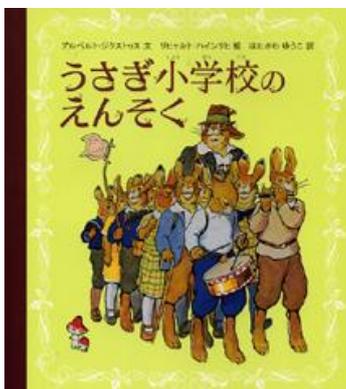
この絵本は「いまないたからすが もうわ



「よし、よし、よし」と言葉をかける、すると赤ちゃんは笑う。

こんな経験をしながら赤ちゃんは幸福感を味わって育つ。それを赤ちゃんは絵本の中でもう一度味わうことができるのがこの本である。

「らった」というわらべうたをもとに生まれた絵本だという。この絵本の中心は「よしよし……」という言葉だろう。赤ちゃんが泣いていれば思わず抱き上げて、



『うさぎ小学校のえんそく』(アルベルト・ジクストウス・文 リヒャルト・ハインリヒ・絵 はたさわゆうこ・訳 1365円 徳間書店)

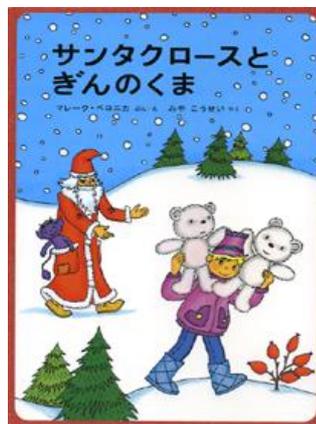
うさぎ小学校は終業式の翌日が遠足。今学期成績の悪かったハンスも、

どうやら遠足の参加を、お父さんから許されたようです。遠足は家族全員で参加です。暗くなるまでゲームをやったり、お遊戯したりそれは楽しい遠足でした……。鍋たたきなんて遊びが出てきますが、日本の「すい

かわり」にそっくりですよ。1930年の出版で、ドイツの古典絵本で、前作『ウサギの小学校』の続編で、今でもドイツでは人気のある絵本。

『サンタクロースとぎんのくま』(マレーク・ベロニカ・作 みやこうせい・訳 1260円 福音館書店)

サンタさんからプレゼントに、兄のマルチはぎんのクマを貰い大喜び、妹のモニカのプレゼントはまりだったのでしくしく泣き出した。欲しいのはぎんのクマだからです。



そこでマルチも一つぎんのクマを手に入れるために出かけました。まずは町のおもちや屋

へ。しかしぎんのクマはありません。雪だるまが教えてくれました。そこで森の奥のサンタさんのところへ……。

『魔女と森の友だち』(湯本香樹実・文)



ささめやゆき・絵 1260円 理論社)

魔女は不平不満ばかり、それを唯一励ま

し、「もつと魔法の勉強をするように」と意見を言ってくれる鏡。あるとき魔法は鏡との友情を否定したとたんに、鏡はひび割れてしまったのです。ひとりぼっちになつてしまった魔法はそこで初めて気付くのです。どんなに鏡が自分にとって大切だったか。ある時ハタネズミが病氣の子どもを連れて魔法に頼むのです。「魔法の薬で治してください」……。

『タトウとパトウのへんてこマシン』(アイン・ハブカインとサミ・トイボネン・作 いながきはるみ・訳 1260円 偕成社)

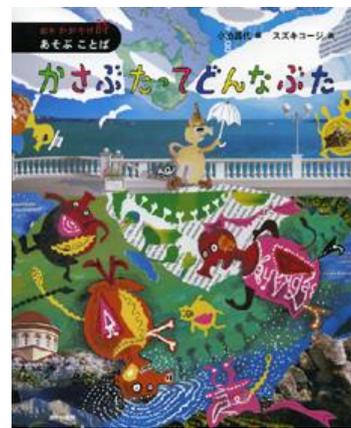


これはタトウとパトウという男の子2人の発明した夢の機械を紹介した楽しい絵本です。

14の機械が登場しますが、その発想はナンセンスで楽しいものばかりです。「水たまりマシン」は近頃の道路は舗装されていて、水溜まりもできません。そこで、水溜まりを作る機械の登場です。そう言えば、水溜まりは「飛び越えたり」水溜まりの中に足を突っ込むだけでもうれしかったものです。そう、子どもたちの格好の遊び場だったのです。小鳥だって喜んで水浴びをしたたの

ですぬ……。

『かさぶたつてどんなぶた』(絵本かがやけ詩 あそぶことば 小池昌代・編 スズキコージ・キコージ・絵 1890円 あかね書房)



全部で18編の詩が集められた一種のアンソロジー絵本詩集です。テーマは「ことばの」のおもしろさです。おちゃのじかん(島田陽子)まいにちのむちゃ おいしいちゃ からだにめちゃつめちゃいいちゃ のまなくちゃりよくちゃ こつちゃ ウーロンちゃ むぎちゃ くこちゃ げんまいちゃ うめちゃこぶちゃ だいふくちゃ まつちゃ せんちゃ ジャスミンちゃ ばんちゃ ほうじちゃ ひやして れいちゃ いつでものむちゃ すきなちゃ どのちゃ おしゃべりぺちゃくちゃたのしいティータイム 何てのはいかがです。コラージュを駆使したコージさんの絵も楽しい。



『ゆきだるまくん、どこいくの?』(たむらしげる・作 1050円 偕成社)

男の子が作った雪だるまが、スキーを履いて山のてっぺんから滑りだしたのです。ところがクマと衝突。怒ったクマがどこまでも追いかけてきます。スキー大会に紛れ込んで一等賞、でもクマはまだ追っかけてきます。いつの間にか町へ出て、海へ出てそれから……。さて結末は?

『ねぼすけはとどけい』(ルイス・スロポドキン・作 くりやがわけいこ・訳 1470円 偕成社)



スイスの村の小さな時計屋さんには鳩時計がたくさんあります。中の一っだけはなぜかいつもとだけ遅れて出てきます。村の子どもたちはそのことをみんな知っていて、それを楽しみにしているのです。あるとき王さまがやってきました。鳩時計を全部買うというのです。ところが例の時計のことを知って、王様は怒ったのですが、明日まで待つことにしました。子どもたちのひとりか「ハトがねぼすだからおくれる」と言ったのです。そこで、おじいさんは良いこともいついたのです……。村の子どもたちと時計屋さんのおじいさんの暖かな気持ちにじんでくる絵本。作者スロポドキンは「百まいのきもの」(岩波書店)でも定評がある。

『ねぼすけはとどけい』(ルイス・スロポドキン・作 くりやがわけいこ・訳 1470円 偕成社)

## 神田古書市場(3)

前号の続き

なるべく近寄らないといつても、他の人が入札すれば、当然こちらの作戦も変更しなければなりません。そうこうするうちに開札時間が迫ってきました。ぼくは意を決して、ねらっている本の封筒に入札値段を書きいれました。

様子を見ながら会場を回っている間に、ほかに3つ入札したのです。中の一つは洋書絵本ばかり40冊ぐらいの一本口で、ちょっと触手が動いたので応札しました。こちらは10を越える入札があります。

でも、どうしても落札したいという程ではありませんから、気楽に数字を書いて入れました。この結果を先にいうと、ぼくの入れた6千数百円では遠く及ばず、1万8千円ほどで落札されたのでした。

あとののは是非欲しいというのでなく、せつかく来たのだから何かしら仕入れないと、という気持ちで、これが一番駄目な仕入れ方なので後思います。こういふときに限って、落札してしまうと言う悪い予感がしたのですが、案の定2つとも落札してしまっただのです。

この8月の市でぼくは、最低価額の2千円で落札が可能か実験してみたくなったのです。そこで、だれも入札者のいない封筒

に2千円と書いて入れたのです。ほかにいないのですから、結果は当然2千円でぼくが落札しました。

ところが、これには後日談があるのです。市場では会場の隅から、一通りごとにひもで仕切って開札していきます。開札が終わった通りは、落札者がカーゴで、部屋から本をどんどん運び出します。

このときは混乱はちよつとしたものですが、みんな早く引き上げたのでしよう。ぼくの場合は2階まで下ろし、そこで荷造りして静岡へ発送するのです。

いつもは係りの人から、自分の落札した一覧表をパソコンからプリンアウトしてもらって、チェックしながらカーゴに乗せるのですが、このときはチェックしないで落札した本を2階に運んで荷造りし、その後で一覧表を貰ったのです。

それを見ると、落札の口数は4口で、どうやら一口足りないようなので、混雑する会場をあちらこちら探したのです。

それが2千円で落札した本だったのです。しかし、探しても見あたりません。もしかした、ぼくの勘違いで落札した本は全部荷造りし終わったという気もしたのです。念のため係りの人と再度探したが、みあたりません。なんだかスッキリしないけど、先を急いでいたのでそのままにして古書会館を後にしました。

数日後、古書会館から電話があり、「ピッ

ポさんが先日落札した本がまだ一口残っているけどどうしますか?」

「やっぱりだ! どんな本だったか記憶にすら残っていないのだから、一瞬「廃棄してください」と告げそうになったが、自分の落札した本を廃棄では、あまりにも失礼だと思ったのです。」

「もし良ければ有料ですが荷造りをしておくります」と言ってくれたので、お願いしました。翌日届いたのですが、これが何と代引きで4800円。

実験のため2千円で落札したものを、自分のドジのためさらに4800円も掛かってしまったのでした。しかもその本段ボール3個口は今もそのままあるのです。馬鹿な実験でした。

さて、今回の本命についての結果を報告しなければ終わることができません。

いよいよ開札が隣まで来ました。再度封筒を見たらばく以外に2人入札者がいたので、さつそく改め札を入れることにしました。それまで最高値を5千9百円としていたのですが、今度は改めの値段は下が5千9百円とし、上の値段を7千9百円としたのです。結果、ぼくが7千9百円で落札できたのでした。もし5千9百円のままだったら、落札を逃したところでした。

帰ってきて「えほん百科」をインターネットで調べたら、この本は瀬田貞二さんの編集だったのです。